

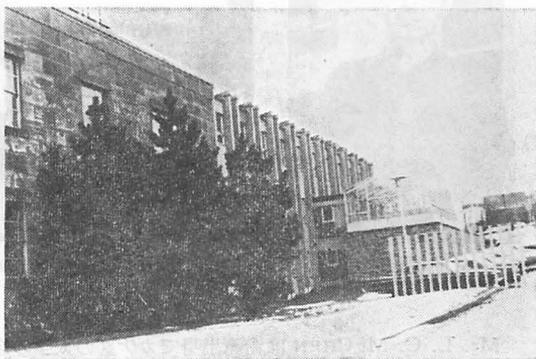
カナダの Atlantic Regional Laboratory の話

尾 形 英 二*

E. OGATA : Story on the Atlantic Regional Laboratory in Canada

筆者が留学のためにカナダの Halifax にある Atlantic Regional Laboratory に到着したのは、1968年4月17日であった。丁度1年滞在し、貴重な経験を得て1969年4月6日に帰国した。Atlantic Regional Laboratory というのは、カナダの National Research Council に直属の研究所であって、2つの Marine Botany Section を含め 化学・物理・微生物等 8 Section からなっている。筆者が属したのはもちろん Marine Botany Section であるが、主として Systematics and Ecology の Subsection の方で仕事をした。Section Head は Dr. J. McLACHLAN であり、他に Dr. T. EDELSTEIN, Mr. L. C. M. CHEN がスタッフである。Physiology and Biochemistry の Subsection の Section Head は Dr. J. CRAIGIE であり、ここにも筆者は頭をつつこんで、ある程度の仕事をしてきた。

Dr. McLACHLAN は御存知のように Proceeding of the 5th International Seaweed Symposium, Halifax の編者である。この人は何でもやる人で、微細藻類・藍藻類の培養・生理等をはじめ、海藻の光合成にも手をつけており、まことに守備範囲の広い研究者である。こういうタイプの藻類学者は日本にはあまり見当たらないように感じる。大変温



Atlantic Regional Laboratory

厚な人で好人物であったが、彼のスピーキングのわかりにくいには、筆者の会話力不足のせいも手伝って大いに閉口した。最近主として紅藻・褐藻の培養に手をそめており、特に *Bonnemaisonia* の生活史にエネルギーを傾注していた。*Trilliella* の四分胞子を培

*Eizi Ogata : 下関水産大学校 (Shimonoseki University of Fisheries, Yoshimi, Shimonoseki, Japan)

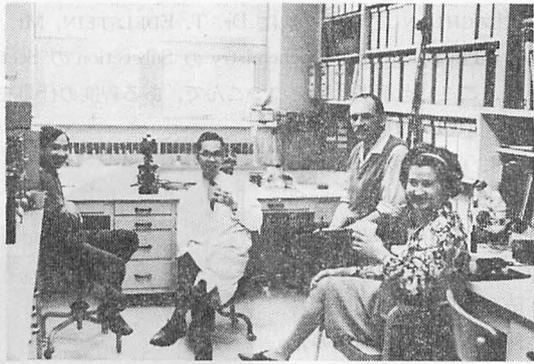
The Bulletin of Japanese Society of Phycology, Vol. XVII, No. 2, 85—87, Aug. 1969

養して、体高5cm位の *Bonnemaisonia* に2年がかりで育て上げていた。*Petalonia-Ralfsia* の生活史にも力を入れていた。御存知のようにこれら各種の生活史は日本人学者によって先鞭をつけられたものである。ちなみに、1968年6月中旬に *Bonnemaisonia* で有名な国立科学博物館の千原光雄博士が、この研究所の招きで5日間ほど Halifax を訪問された。異境での思わざる邂逅に時を忘れて歓談できたのも楽しい思い出である。

Dr. T. EDELSTEIN はサッパリした女丈夫で、気持ちのよい中年女性の分類学者である。面白い微小海藻を顕微鏡下で発見すると、“Hi!, Look!” というわけでいろいろなものをみせてもらった。女性であるために、“Oh, beautiful!”, “Oh, nice!” とすこぶる感受性豊かに教えてくれたので大いに勉強になった。この人は Endozoic な微小海藻に特に興味をもち、この方面の論文も多いが、一方一般的なフロラや生態、また培養にも興味をもって、特に *Petalonia-Ralfsia* の生活史については Dr. MC LACHLAN とともに大いに血道を上げていた。しばしば Dr. NAKAMURA, Dr. TATEWAKI の名を聞いたものである。



Dr. Craigie



左より Mr. Chen, 筆者, Dr. Mc Lachlan, Dr. Edelstein

Mr. L. C. M. CHEN は台湾出身でカナダの大学の修士をへてこの研究所のスタッフになった人である。まだ着任してから2年目位であったが上記各種の培養の実際面は主としてこの人が担当していて、東洋人独特の勤便さでコマネズミのように働いていた。日本語は殆どダメであるが、上記 Dr. EDELSTEIN と同様スピーキングがわかりやすかったために筆者にとっては大いに助かった。また漢字で筆談もできたのも便利であった。彼は電子顕微鏡に興味をもっていたが、筆者の居た時点ではもっぱら培養の実際面をうけもっていて、上記 *Bonnemaisonia*, *Ralfsia* 以外にも *Nemalion*, *Polysiphonia*, *Gracilaria* 等多数の種類を培養していた。

これらの人々のチームワークはすばらしく、それぞれの特技を生かして共同研究し、

できた論文は常に3人の共著にしていた。このような緊密な横の共同研究は、日本のように縦の研究系列でしか共同研究が行なわれ難い国から来た筆者には大変羨しい感じがした。

筆者の仕事について述べさせて頂くが、筆者は日本におけるテーマを生かすためにやはり *Porphyra* の研究を希望した。たまたま Dr. CRAIGIE が米国留学中だったので、必然的に Dr. McLACHLAN のもとで *Porphyra* の培養・生活史の研究が主テーマになった。*P. miniata*, *P. umbilicalis*, *P. linearis*, *Bangia fuscopurpurea* などの free-living の *Conchocelis* を培養研究し、ある程度の成果をあげた。

Physiology and Biochemistry の Subsection においては Dr. CRAIGIE とともに各種 *Porphyra* のフロリドサイド・イソフロリドサイドと甘味の関係、干出中のノリの光合成の¹⁴Cによる測定などについて仕事をしたが、培養実験の方に大幅に時間をとられ十分に勉強ができなかったのが残念であった。

Dr. CRAIGIE は会うたびに“Hi!, Eizi!” と大声で挨拶をする快活な快男児で、わかりやすい英語を話してくれた。この Dr. CRAIGIE も Dr. McLACHLAN も筆者があまりノリ！ノリ！と騒いだために、すっかりノリづいてしまって、いろいろな方面で *Porphyra* の研究に手をつけはじめた。Dr. EDELSTEIN は海藻のにおいも魚くさくてきらいという位だから、はじめはノリにはあまり関心を示さなかったが、日本式の *Porphyra* の分類法を説明すると大いに興味を示しはじめたようであった。

ここの Marine Botany Section で一年間仕事をして感じたことは、日本の藻類学者の層の厚さ、特に *Porphyra* に関する研究者層の厚さであり、逆に羨しく感じたことは上述のチームワークのよさ、テクニシャンが充実していること、設備のよさ、豊富な消耗品（紙タオルなど使い放題）などの点である。

また、上記の研究者達が日本の藻類学者との交流を望んでいることも強く感じた。彼等は、なぜ日本人は英語で論文をかかないのかと残念がっており、どんな小論文でも英語のサマリーが欲しいといっていた。

筆者はこの欄をかりて、将来カナダの藻類学を負って立つ上記の人々とぜひ論文交換をして下さるよう皆様にお願ひ申し上げたい。このことは日本の藻類学のレベルを再認識させる点でも有効であり、また国際親善上にも役に立つと信じる次第である。下記に彼等の住所氏名を附して結びとさせて頂きたい。

Dr. J. McLACHLAN, Dr. T. EDELSTEIN, Dr. J. CRAIGIE, Mr. L. C. M. CHEN
Atlantic Regional Laboratory, National Research Council, 1411, Oxford Street
Halifax, N. S. CANADA